

「箋聞」か「箋」と「聞」か

——夕霧巻を中心にして——

岷江入楚は三条西家の注釈書を中心にして、多くの先行研究をもとに著された。通勝は引用した書目を肩付に略称で注記している。こうした肩付に記された注記に着目して小川陽子氏は「岷江入楚」と先行注釈⁽¹⁾を記された。その中で小川氏は桐壺巻と夕霧巻の「箋聞」とする注記について、桐壺巻「計5例のうち3例」夕霧巻「計5例のうち3例」「は「箋／聞」の割書で、「箋聞」か、「箋」と「聞」とを併記したものか、明確でない」とされた。前稿では、桐壺巻にみられる「箋／聞」について検討を加えたが、小川氏が「計5例のうち3例」とされる「箋／聞」とする注記が十四例見られた。⁽²⁾小川氏がいう「計5例のうち3例」が、桐壺巻十四例のうちどの三例をさすのかは不明であるが、いずれの注も、「箋」と「聞」であるとは想定できない内容であった。本稿では、小川氏が「箋／聞」の割書で、「箋聞」か、「箋」と「聞」とを併記したものか、明確でない」とされた夕霧巻「計5例のうち3例」について検討を加えたい。

小 高 道 子

一 夕霧巻の「箋／聞」

桐壺巻では、小川氏の計算の数倍見られた「箋／聞」であるが、夕霧巻「計5例のうち3例」とする夕霧巻の「箋／聞」とする肩付は見出せない。ここで改めて岷江入楚の記述を見てみよう。通勝は岷江入楚の「箋」とする肩付について次のように記している。⁽³⁾

○ 箋 三光院ノ義 此内或ハ彼抄出ノ処アリ 或ハ予聞書ノ処アリ 然而若菜下ヨリ宇治十帖ハ予聞書ヲ箋ト載了 桐壺ヨリ明石マテハ彼抄、ノ分ヲ箋ト書 予聞書ヲ箋聞ト書之

「箋」は、三光院すなわち三条西実枝の説を記したという。また、桐壺巻から明石巻までは、実枝の聞書を「箋聞」として記したとする。そのため、桐壺巻の「箋聞」が、実枝の講釈聞書を記したことは首肯できる。しかしながら、「然而若菜下ヨリ宇治十帖ハ予聞書ヲ箋ト載

了」と記していることから、夕霧巻では、「箋聞」と記さなくても実枝の講釈聞書であったと推定できる。ここでは、「箋」の右上に「聞」と記した注と、「箋聞」と記した注について、検討を加えたい。

1 45 さらにかばかりすぐくしうおれてとしふる人は
岷江入楚

箋 情ヲ折也 自讃の詞 おれてのて文字清てよむ

箋聞 わかこゝろをおる也 すぐくしうは直ノ字の心なるへし

秘 おれてのて文字古抄濁りてよめり 宮の御心と云々いか、

是は夕霧の自嘆也 かように情を折て堪忍する人は有かたきよし

也

私 此両義尤可用之 然共猶諸抄ノ義為後学註之(略)

禪閣云又説夕霧の事

聞 おれで濁テ心得ル也 又おれては思ふ心をまけておれてゐる

と云義もあり。

永祿奥書 源氏物語紹巴抄(以下「紹巴抄」と略す)

27 すくすくしうをれて 女二へそむかすしてある夕の心情はと

也 もとはおれてと心得てよみ来れり

この項は、「箋」と「箋聞」と「聞」、そして「秘」と「私」の注が見られる。内容も、「おれて」の「て」が清音か濁音か、心が「わかこゝろ」か「夕霧の自嘆」かと、三条西家の注である「箋」と「秘」

の間でも解釈が分かれている。こうした説が分かれていることについて、通勝は「私」として「此両義尤可用之」と記している。説が分かれる項目については、一方のみならず、両方の説を知った上で判断しようとしていたであろう。また、岷江入楚に「聞」として記す内容と、紹巴抄の内容が異なっていることも注目される。岷江入楚では「おれで濁テ心得ル也」とある一方で、紹巴抄では「て」をすんでいるのである。こうした相違はどこから生じたのであろうか。

2 165 昔もたくひありけりと

この注は、「箋」とする肩付の右上に「聞」と記している。そして次の注記がある。

聞箋 かくいふ哥あれは昔もたくひあると也

岷江入楚には「聞」として注が付されているが、紹巴抄にはこの部分の注が見られない。あるいは、実枝の講釈を聴いた若菜巻以降と、それ以前の巻とでは、聞書の扱い方が異っているのであろうか。

これまで岷江入楚は、通勝の「然而若菜下ヨリ宇治十帖ハ予聞書ヲ箋ト載了 桐壺ヨリ明石マテハ彼抄、ノ分ヲ箋ト書 予聞書ヲ箋聞ト書之」とする注記にもかかわらず、全巻を同一の方法で検討してきた。しかしながら、実枝の講釈を聴いた部分と、紹巴の講釈を聴いた部分とでは、岷江入楚の注釈書としてのあり方が異なっている。岷江入楚の成立について検討する際には、若菜以降とそれ以前とに分けて検討

することが必要であろう。

注

- (1) 『中古文学』（平28・6）
- (2) 小高「箋聞」か「箋」と「聞」か―桐壺巻を中心にして―（『中京大
学国際教養学部論叢』平成29・10）
- (3) 『岷江入楚』の引用は源氏物語古註釈叢刊により、源氏物語古注集成
の通し番号を付した。
- (4) 引用は『平安文学資料稿』（広島平安文学研究会）による。

